

## 産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

アフリカ地域では、未だ多くの子ども達が、病気や栄養不足により幼くして命を落としています。その率は世界平均の約2倍。また衛生設備の不足や感染症の拡大など様々な課題に直面しており、未来を担う子ども達が心身ともに健康に成長するため、継続的な支援が求められています。

新しい命の誕生は、家族にとっても、社会にとっても、大きな喜びです。出産をきっかけに家族と企業が一緒になって、アフリカの子どもやお母さんのための支援に参加してみませんか。本プロジェクトは産休・育休の取得促進を応援しながら、アフリカ地域での保健課題を改善する様々な支援を行っています。

### ご支援有難うございます

賛同企業 6社(2022年6月現在)  
住友商事株式会社様  
SCSK株式会社様  
ヤフー株式会社様  
木村情報技術株式会社様  
株式会社ローズマロウズ様  
タキヒヨー株式会社様  
(賛同開始順)

## 「見えない大災害」に襲われた子どもたちに寄り添う

もし、日本で毎年10万人以上亡くなる災害が毎年続いたら、子どもたちはどんな状況におかれるでしょうか。そして、遙か彼方の日本のわたしたちは、そんな子どもたちのために何ができるでしょうか。

マラウィを訪れた日赤ルワンダ現地代表部首席代表の吉田職員は、現地の様子を目にして、こんな問いを胸に抱いています。



見えない大災害に...

©日本赤十字社

マラウィの人口は日本の6分の1、2000万人弱ですが、2020年にHIV/AIDS関連で亡くなった方は2万人以上に上ります。HIV/AIDSの拡大がピークだった1990年代を通し、人口が今の半分の1000万人ほどだったにも関わらず、毎年10万人以上が亡くなり続け、平均寿命が約10年短くなるという悲惨な経験をしました。この結果、2016年までには、18歳未満の子ども6人に1人が孤児になりました。日本や外国からは見え

ないところで、大変な災害がマラウィを襲い続けてきたこととなります。

マラウィの教育システムは、義務教育の小学校8年間、高校4年間、大学4年間の16年です。小学校の学費は無料ですが、高校から教育費用が大幅にかかるようになり、進学するのは就学年齢の約3人に1人であることが分かっています。親を亡くした子どもたちが高校への進学を諦めるのは、自分の学力よりも、置かれた境遇が理由となることが多いのです。

そんな「見えない大災害」に遭った子どもたちの支援に、「産休サンキュープロジェクト」は取り組んでいます。皆様からいただいたご寄付から、マラウィ赤十字社を通じて、農村部の高校生50人に学費を補助し、制服、靴、学用品を配り、彼らが勉強を続けられるようサポートしています。

「プロジェクト地域の村々では、働き盛りの親世代の3分の1が、HIV/AIDSで亡くなりました」とマラウィ赤十字社のエリオット担当職員は言います。「若くして親を亡くした家庭では、残された子どもたちが、生きていくのに精一杯です。私たちは、そんな子どもたちが安心して勉強を続けられるように支援し、彼らの成績もモニターしています。赤十字の支援で高校に通い、優秀な成績を修めて、大学の医学部に進学した子もいます」



©日本赤十字社

2022年4月末、吉田職員がマラウィに出張した際、チポラ・コミュニティ・デイ高校を訪問しました。マラウィ赤十字社は同校の16人の生徒を支援しています。

### “村人が安心して生活できるように、警察官になりたい”

奨学生のダリニさんは、村人が安心して生活できるように、将来は警察官になりたいという夢を持っています。



©日本赤十字社

### “医師になり、困っている人を助けたい”

同じく奨学生のジョン君は、数学、英語、地理と歴史が得意で、医師になりたいと考えています。「家族が患って病院に行ったとき、“貧しい家庭からはお金を受け取らない”と、医師が無償で治療してくれたことに感動し、自分も将来、困っている人々を助けたい」と強く思い、それが医師を目指すきっかけだと語ります。

子どもたちは、目を輝かせ、言葉を選びつつ丁寧に、自分たちの夢を語ってくれました。インタビューの後、顔を綻ばせて子どもたちに冗談を言うエリオット職員を見て、吉田職員は「産休サンキュープロジェクト」を通してマラウィの子どもたちに渡しているのは、単なる学費や学用品だけではないことに気付きました。「親を失い、人の手を借りて生きていかなければならなくなった子どもたちが、“将来の夢を持ち、いつかは自分たちと同じような立場にある人々を救うことができる”、という希望を届けているのだと思います」。

HIV/AIDSという「見えない大災害」は、あっという間に彼らの両親を奪い、彼らは孤独と絶望の中にありました。しかし赤十字は、この教育支援を通じて、時間をかけて、希望という「見えない種」を子どもたちと一緒に育てています。彼らがいつか、同じ境遇にある人々に、希望を与えられるように。

今後も赤十字は、「産休サンキュープロジェクト」を通して、日本の皆様と一緒に、互いに思いやり、希望を見い出せる世界を作っていくと思っています。

日本赤十字社は、国際赤十字・赤新月社連盟を通じて南部アフリカ地域の「感染症対策事業」も支援しています。



赤十字のボランティアは、貧困層の子どもたちに感染予防の教育を行っています。(ナミビア)

©国際赤十字・赤新月社連盟

## あばばいはい通信

日赤ルワンダ代表部首席代表の吉田拓がお届けします！

## ジェノサイドから28年、ルワンダで続く平和への戦い



©日本赤十字社

4月7日、ルワンダでは、1994年に発生したジェノサイドから28年を迎え、世界各地で犠牲者の追悼式典が行われました。1週間の追悼期間中、現地の人々は静かに過ごしました。

ジェノサイドについては、「階級」であったツチ、フツという概念が、植民地化を経て「民族」にすり替えられた背景があるとされています。当時のベルギーは少数派のツチ族を優遇して多数派のフツ族の支配を試み、フツ族はツチ族に対する反感を募らせていきました。ルワンダ独立後フツ族は政権を掌握し、ツチ族との緊張関係が高まり、ついに、破滅的なジェノサイドが起こり、50万人から100万人の一般市民が命を失ったとされています。当時、ルワンダ赤十字社の敷地にあった赤十字の孤児院にも暴徒が乱入し、子どもたちと職員の合計65人が命を奪われました。人道の寄る辺となるべき赤十字の施設で、犠牲者がどんな痛恨の思いで無念な最後を迎えたかを思うと胸が張り裂けそうになります。

現地の人々にとって、ジェノサイドはいまだに繊細な話題です。ルワンダ赤十字社で一緒に働く同僚たちは、当時10～20代の多感な時期にあり、みな大変な経験をしたようです。虐殺から逃れるために隣国のウガンダへ逃げ、そこで

武装組織に加わり、ルワンダに戻ってきたことを教えてくれた同僚も、それ以上は口を閉ざしてしまいました。

ジェノサイドの大きな理由に挙げられているのが経済的格差です。ツチ族に富が偏った結果、多くのフツ族は教育を十分に受けられず、貧しい暮らしを送らざるをえませんでした。彼らは、社会問題の原因はツチ族にあると言い立てる政府高官やラジオの言うことを鵜呑みにし、虐殺に加担してしまつたとされています。貧困は、他者に対する寛容さを忘れさせ、憎しみを増長するのかもしれない。

あれから28年、アフリカの奇跡とよばれる高度経済成長の最中にありながら、都市と地方の格差、貧富の格差は依然としてルワンダの大きな課題です。赤十字の開発協力事業は、その貧困との戦いです。現地の人々が、暮らしを小さな喜びで埋めていき、今日よりも明日が良くなるという希望をもつための挑戦です。日本赤十字社とルワンダ赤十字社が実施するプロジェクトでは、村人の暮らしを改善するため、牛を配っていますが、配った牛が産んだ子牛は近所の村人に渡され、子牛を受け取る村人は、親牛の面倒を見ている村人を助けるという、村人同士が助け合う仕組みを作りました。村人に配るモノがモノ以上の価値を



©日本赤十字社

赤十字から配られた牛の飼育を始めた村人の女性。赤十字ボランティアの助言を受けつつ、面倒を見ています。

赤十字の啓発活動を受けて、庭に菜園を作り、その日の食事のためにホウレンソウを収穫する女性。この日の食事はマメ、ホウレンソウ、塩漬けの小魚のトマト煮でした。

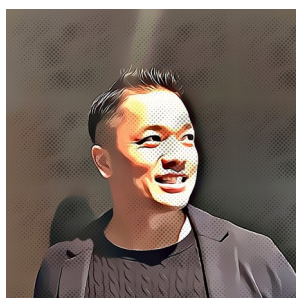
持ち、人々が助け合いと寛容さを持って一緒に暮らしていくことに繋がるよう、ルワンダ赤十字社の同僚と心掛けています。こうした積み重ねを通して、村人がふと豊かさを実感できるような、平和な社会に変えていく、私たちはそんな挑戦を続けています。世界中で平和の尊さが強く求められている今こそ、赤十字の平和を求める挑戦に、今後とも一層のご支援をよろしくお願いいたします。



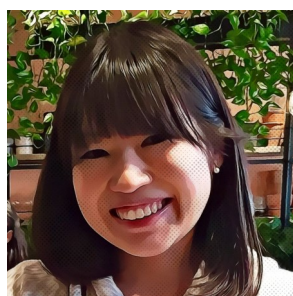
©ルワンダ赤十字社

### 編集後記：

マラウィでは、皆様のご支援を受けた子どもたちが、今度は自分たちが困っている人を助ける番だと言ってくれ、目が覚める思いでした。ただ助けて「いる」から、助けて「くれる」の輪が広がる仕事をしていきたいです。(吉田拓、日赤ルワンダ代表部首席代表、キガリ在住)



17歳の時にアフリカ・シエラレオネの本を手にとったことが、国際支援に携わりたいと思うきっかけとなりました。が、未だアフリカには行ったことがありません…。本プロジェクトを通じて届く現地からの声に耳を傾け、現地で本当に必要とされる意義ある活動のために、皆さまからいただいたご支援をお届けできるよう、チーム一丸となって引き続き取り組んでいきます。(木村美羽、日赤本社国際部開発協力課)



5月より産休サンキュープロジェクトチームに加わりました。わたし自身、アジアやアフリカの開発途上国で子育てをしつつ、お仕事をしてきました。アフリカに生きるお母さんや子どもたちの目線に立って、わたしたちが今、日本にいてできることを、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。(山岸信子、日赤本社国際部開発協力課)



■ 日本赤十字社 国際部 開発協力課  
産休サンキュープロジェクト担当

電話：03-3437-7089

Eメール：[sankyuthankyou@jrc.or.jp](mailto:sankyuthankyou@jrc.or.jp)

■ [Yahooネット募金](#)を通じたご寄付はこちらから：

日赤 産休サンキュー Yahoo募金

検索

